

目覚めよ！75歳以上の年寄り

寄稿 作家 米谷ふみ子

去年九月、米国の著名なインタビュアーであるチャリー・ローズ氏がテレビ番組で、「彼は日本の平和憲法を変え、強い軍隊を作りたいと考えている」と言うのを聞いた。彼とは、安倍晋三首相。番組では、「集団的自衛権に対する憲法解釈の検討」と「憲法に自衛隊の存在を明記すべきだ」との持論を日本語で語っていた。

私は米国に五十年以上住んでいて教育費や福祉費が削られ軍事費に回されるのを見て来た。日本の指導者には平和憲法をこそ、世界に自慢してもらいたいと思っているのだが……。

ある時、ロサンゼルス市で編集者をしている四十歳くらいの日本人女性に「もし軍隊を持って戦争になれば、内地でも戦場でも人が何百万と死ぬのよ」と言うと、「戦争でそんなに多くの人間が死ぬんですか？」



戦争の残酷さ伝えよう

と聞かれ、若い世代が戦時中の恐怖を知らないことに啞然としたのだった。

戦争を覚えているのは七十五歳以上の人々だ。次世代の無知は、一重に、その残酷さを語り継がなかった私たちが老人の責任である。この時気が付いたのだ。日本に住む友人から、最近、記憶力を保つためにマージャンをしている年寄りが多くいると聞いたが、あの悲惨な戦争の体験を思い出し、繰り返し若者に話す方が、よっぽど記憶力活性化の役に立つのではないか。

戦中、日本は資源不足で鍋釜を寄付させられ、貴金属を取り上げられた。我が家も供出したが、返してもらっていない。政府に騙されたという思いは今も消えない。

空襲で家や工場が焼かれ粉じんで空気汚染も甚だしく、そこらじゅうで死体を見た。大阪・梅田の地下街

には、逃げ惑う時に親とはぐれた子供が屯していた。政府は炊き出しなんてしてくれなかった。食べる物はなく、トイレもない。私が通学で使った駅の水洗トイレは断水で詰まっていた。

ましてや戦場にはトイレはない。至近弾が落ちると恐怖でちびつてしまう。汚れた糞尿を体に着けたままで虫や蛇にかまれ、蛆が湧いてもそのまま。病気にもなる。生き残り、やっと日本からの救助ボートが来ても、乗る体力がなく波打ち際で死んだ兵隊が、ガダルカナルなど南方戦線には多くいたそうだ。

昔「平和を作るには軍隊を持つな」と哲学者カントが言った。全く正しい。どうして指導者になると、軍隊や核兵器を持ちたくなるのだろうか？ 他人の持ち物を自分もほしいと思うのは自信のない証拠。放射能は、指導者であろうが罪人であろうが敵味方に平等に降り掛かることが分からない人は、指導者になるべきでない。

福島の核禍を治めずに、現政権は特定秘密保護法を通した。原発事故の実態も秘密にするのか？ 戦中の「女は黙っとれ！」を思い出す。年寄りよ！ 遅くはない、戦争の残酷さを赤裸々に語ろう。

こめたに・ふみこ 1930年大阪市生まれ。作家・画家。60年に渡米、ロサンゼルス在住。「越しの祭」で芥川賞、「フアマリ・ビジネス」で女流文学賞。エッセー集に『ロサンゼルスに愛すべきダンス仲間』『年寄りはだまっとれ！』など。